




小樽南ロータリークラブ会報

1960年創立
昭和35年2月5日

30


2021年4月23日発行
通巻 第2940号

Rotary 

2020-2021年度IRテーマ

2020-2021年度 RI第2510地区目標
「守・破・離」の心で
初心を忘れず！変化を恐れず！
希望の扉を開けましょう。

- 2020年ロータリー100周年を祝おう
- 会員基盤の強化
- IT活用の推進と公共イメージの向上
- 1クラブ1プロジェクトの推進
- ロータリーファミリーへの支援と学友連携の強化
- クラブ戦略計画の作成に期待


ロータリーは機会の扉を開く

今週4月23日金のプログラム

- 卓話：札幌東RC 矢橋氏

来週4月30日金のプログラム

- 卓話：ガバナー補佐 岩内RC 東山氏

再来週5月7日金のプログラム

- 休会

●例会場/オーセントホテル小樽 ●例会日/毎週金曜日12時30分 ●事務局/〒047-0032 小樽市稲穂2-15-1(オーセントホテル内) TEL.0134-27-8080 ●Club Homepage URL <http://rid2510.org/otarusouth/>

●第29回例会報告 (4月16日金) ●卓話：北海道新聞小樽支局長 相原氏

■ロータリーソング【それでこそロータリー】

■ゲストビジター紹介

ゲストスピーカー 小樽ロータリークラブ 相原秀起氏

■会長挨拶【斎藤会長】

今週12日月曜日に開かれました、第2510地区諮問委員会にて2023-2024年度松浦ガバナーノミニーが正式に承認されました。クラブあげて支えていきたいと思っております。ご協力よろしくお願い致します。

また、先週例会終了後に行われました松浦ガバナー予定者年度における人事特別委員会にて、私が松浦ガバナーの地区代表幹事を務める事となりました。その他、地区大会実行委員長、年度クラブ会長についても議題に上がっておりますが、まだ当然発表できる体制ではありませんので、ご了承頂きたいと思っております。近々に、松浦ガバナーノミニー予定者と小樽クラブ、銭函クラブにご挨拶に伺いたいと思っております。

さて、今週は第6グループロータリアンに卓話をいただく10人目として、相原道新小樽支社長にお越しいただきました。小樽クラブとしては先月のしんきん大谷支店長に引き続き6人目となります。相原支社長には私が会長就任した昨年7月、3クラブの会長で道新小樽支社に表敬訪問した際、卓話のお願いはしておりました。その時点で早く即断即決いただいております。

今日は小樽と樺太のお話しをいただく事となっております、大変楽しみにしております。今日はよろしくお願い致します。

小樽は樺太からの引揚者が多い街です。ご多分に漏れず私のダンススクールにも、樺太から引き上げてこられた方々が多数おりました。その中のお一人との雑談をご紹介します。

昭和7年生まれその生徒さんは、終戦を南樺太でむか

えられ、昭和23年まで現地にご家族とご一緒に、函館港に引き揚げるまで暮らされておりました。戦後すぐにソ連兵が各家庭に一人ずつ居座っていた事、街中での銃声は日常茶飯に聞いていたことなどいろいろ話してくれました。

衝撃的だった話しを一つ。ある日の学校帰り、誰かが銃で撃たれ道端で倒れているのを目撃しました。横に回り顔を見ると、なんと通っていた小学校の先生だったそう。そういえばこの先生、ズボンのポケットに手を突っ込んで歩くのが癖だったから、きっとそれが原因でソ連兵に撃たれたんだ…、と思いながらその遺体を横目で見ながら、そそくさと帰宅したというのでした。

それって凄いことだけど、なんとも思わなかったのかい、と私が聞き返すと、今考えれば、確かにすごいことだよ。でもその時は、なーんにも感じなかったわ、との返答…。戦争を知らない私が、改めて戦争の悲惨さを目の当たりにした瞬間でした。

■幹事報告

●3クラブ合同例会 5/29(土) 16:30点鐘
グランドパークホテル小樽 (登録料7,000円はクラブ負担)

■委員会・同好会報告

【野村次期会長】

4/23(金)例会終了後、次年度理事役員会を開催します。

■出席委員会

令和3年4月16日(金)

会員総数 64名 本日の欠席者 0名
理事会決定により100%出席
リモート出席者 5名
米山、田中、宮川、山下、小林

令和3年4月2日(金)

確定出席率100.00%

■まごころ箱 いつも有難うございます!

- 斎藤会員** 相原支社長、卓話ありがとうございました。
36回目の結婚記念日です。
- 斎田会員** 夫人誕生日。
- 大倉会員** 夫人誕生日。
- 松浦会員** ガバナー・ノミニーに決まりました。色々ご面倒をおかけ致します。
よろしくご指導の程、お願い致します。

入金集計額

【令和2.7.3~
令和3.4.16】

4月16日分
16,000円

合計 **857,000円**



卓話 小樽と樺太 ― 忘れられた繁栄の記憶 ―

北海道新聞小樽支社 相原秀起支社長（小樽RC）

皆様、こんにちは。

私は北海道新聞小樽支社長の相原秀起でございます。日頃、弊社の記者や営業部員が大変お世話になっております。

本日の卓話のテーマは、道新小樽支社で始めている動画配信講座「小樽、栄華の記憶」で、私が担当した「小樽と樺太 忘れられた繁栄の歴史」をテーマに話させていただきます。

私は25年前、道新のサハリン（かつての樺太）駐在員としてユジノサハリンスク（旧豊原）支局に1年駐在し、以来、ロシア極東を中心に取材してきました。樺太へは10回以上行ったと思います。この取材で小樽と樺太の深い関係を知ったわけです。

旧日本郵船小樽支店で、115年前の明治39年、1906年11月に日露国境画定会議が開かれました。日露戦争終結の翌年に当たり日本がロシアから南樺太の割譲を受けて国境線画定作業を話し合うために開催されました。市民の中にはこの小樽で樺太の割譲が決まったと誤解されている方がいるようですが、米国ポーツマスにおける交渉妥結時、南樺太の割譲は決まっており、この小樽では国境線画定の具体的な作業手順が話し合われたのです。樺太の国境線の目印として置かれた国境標石で、実際に戦前に撮影された標石の写真と設置場所の地図です。オホーツク海から日本海まで北緯50度線に沿って、総延長131キロに及ぶ森が切り開かれて、4基の標石が置かれました。

現在根室市歴史と自然の資料館に展示されている4基の標石のうちの2号標石で、日本に現存する唯一のものです。私はこの2号標石が1997年に根室に運ばれた際、その返還に加わりました。

南樺太が日本領となると、小樽からいくつもの航路が樺太各地へ伸び、小樽は樺太への人の往来と物資の供給基地となります。日本郵船の主要航路図です。

ちょっとだけ寄り道をさせてください。地図に「北千島」と書かれています。現在、北海製罐第3倉庫の存続問題が注目されていますが、北千島、さらにカムチャツカ半島各地には各地にサケマスやカニの缶詰工場があり、北海製罐の缶が運ばれたのです。カムチャツカ東岸ウスチカムチャックの日魯漁業の工場の写真で、手前に缶詰が並んでいます。これは北千島幌筵（パラムシル）島の播鉢湾の工場群です。この写真は2013年に私が撮影した幌筵島の工場跡です。

樺太の話に戻ります。当時、樺太では「国境観光」という観光のジャンルがあり、人気を呼びました。小樽から730キロ北にある日本海に面した安別という村にあった標石を囲んだ記念写真で昭和12年に撮影されたものです。最果ての北緯50度線の映像をご覧ください。私が2013年8月に撮影したものです。戦後ここに立った日本人は私だけだと思います。ここにあったはずの標石はもうありませんでした。それを所持している島民を探し当て、絶対匿名を条件に標石の撮影を許されました。間違いなく、これが4号標石です。

この樺太の国境線は、太平洋戦争の終戦まで40年間存在したのですが、この間のもっともスキャンダルな事件が1938年1月3日に起きた岡田嘉子のソ連越境亡命事件です。岡田はこの美貌の映画女優で、実は小樽とゆかりがあります。父親は、小樽の新聞社「北門新報」の主筆で、岡田も一時期小樽で記者をしていました。

新劇女優を目指し上京した彼女は一躍映画スターとなり、演出家の杉本良吉という男と不倫の恋に落ちます。二人は共産主義にあこがれて、ソ連への越境亡命を企てます。

二人はソ連側の警備隊によって逮捕され、杉本は拷問の末、日本軍のスパイと嘘の自白を強いられて、銃殺刑になります。岡田も刑務所に収監されます。釈放された岡田はモスクワのラジオ局でアナウンサーとして働き、1972年に日本に里帰りしました。小樽にもやってきます。

戦前、樺太の豊かな石炭や森林資源、サケやニシンなどの漁業資源は近代日本を支えて、小樽は樺太を結ぶ航路の中継地・定期航路の基地として絶大な恩恵を受けたと小樽市史は記録します。色内の銀行街ができた背景も樺太という植民地経営が大きく関係しています。

小樽駅によく似た駅舎は、樺太の西海岸にあった真岡駅です。真岡にあった製紙工場、珍内の発電所、そして鉄道網です。いずれも日本時代の戦前に建設されたものです。現在、サハリンを代表する観光名所であるサハリン州郷土博物館、戦前の樺太庁博物館です。当時、樺太で消費される物資の75%は小樽経由で出されたとされ、終戦で樺太を失った結果、小樽経済は大打撃を受けたのです。

終戦から75年が経過し、樺太の記憶も薄れました。水天宮の社殿の陰に石碑がひっそりとあります。樺太の国境線にあった小型の中間標石です。大きな国境標石との間に設置されていたもので、この石は使われずに樺太から持ち帰られて、当時の小樽区に寄贈されたものとされます。小樽で薄れゆく樺太の記憶と誰も知らない中間標石、それが私には重なって見えます。ご清聴ありがとうございました。